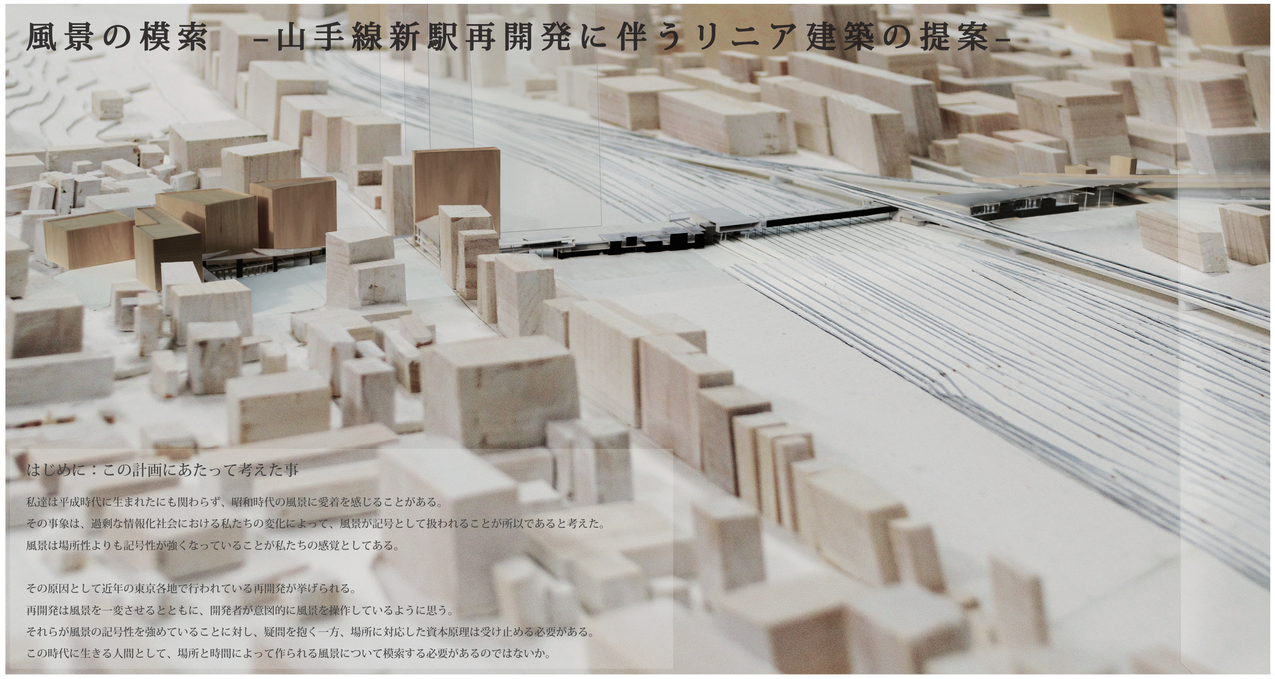
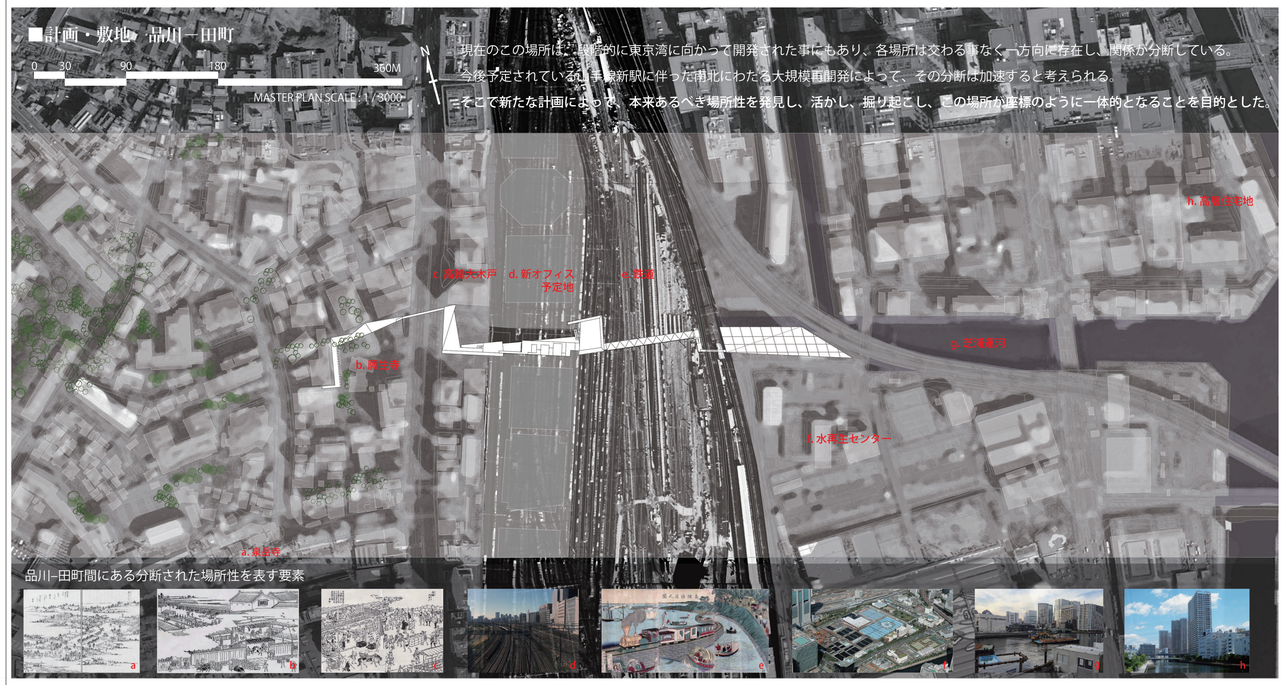
風景の模索　–山手線新駅再開発に伴うリニア建築の提案–



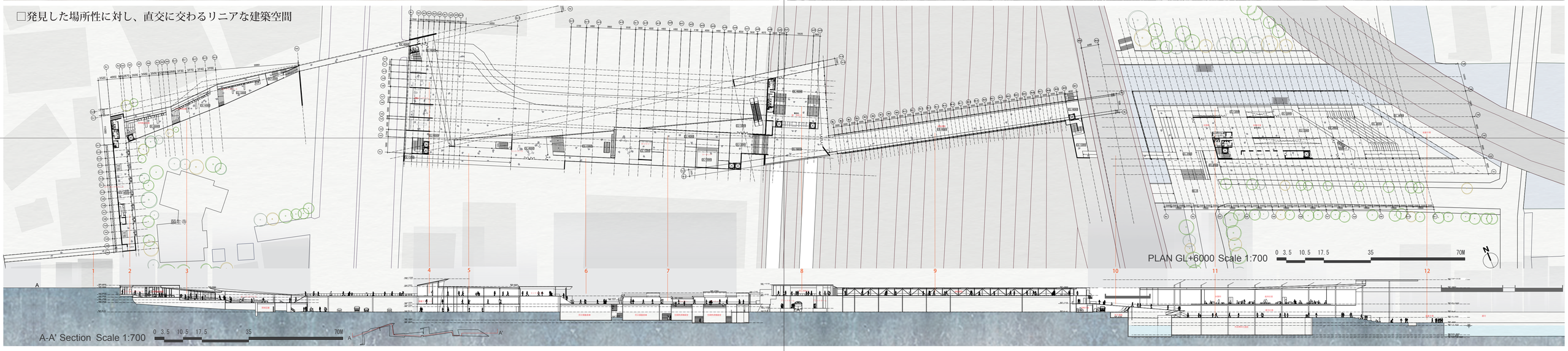
はじめに：この計画にあたって考えた事

私達は平成時代に生まれたにも関わらず、昭和時代の風景に愛着を感じることがある。
その事象は、過剰な情報化社会における私たちの変化によって、風景が記号として扱われることが所以であると考えた。
風景は場所性よりも記号性が強くなっていることが私たちの感覚としてある。

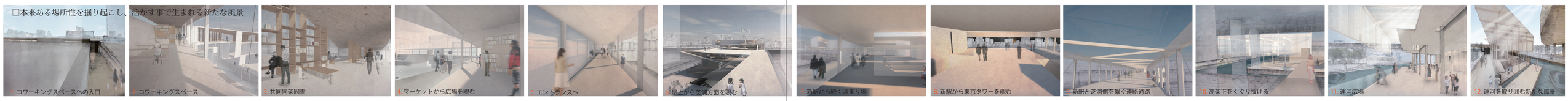
その原因として近年の東京各地で行われている再開発が挙げられる。
再開発は風景を一変させるとともに、開発者が意図的に風景を操作しているように思う。
それらが風景の記号性を強めていることに対し、疑問を抱く一方、場所に対応した資本原理は受け止める必要がある。
この時代に生きる人間として、場所と時間によって作られる風景について模索する必要があるのではないか。



□発見した場所性に対し、直交に交わるリニアな建築空間



□本来ある場所性を掘り起こし、活かす事で生まれる新たな風景



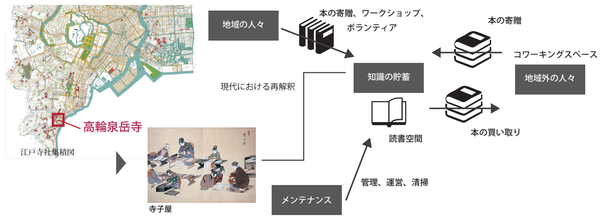
□機能　土地の履歴の顕在化 / 再解釈による循環と貯蓄

なおざりにされた土地の履歴を発見し、その不可視的な歴史的集積を再解釈し機能として絡めることで、建築物に意味を付加させる。この地に根付く江戸、近代の履歴は旅や物流に基づく機能。私たちはその履歴を再解釈した時に貯蓄と循環という言語を発見した。貯蓄は知識や物資の集積としての機能、循環は都市交通網の不足分を補う新しい交通として水上ネットワークを提案する。これらの機能の計画によって、形態に加え、多様な軸が重なり、大きな座標として場を生んでいる。

1．貯蓄 - 物資集積による人の流動計画

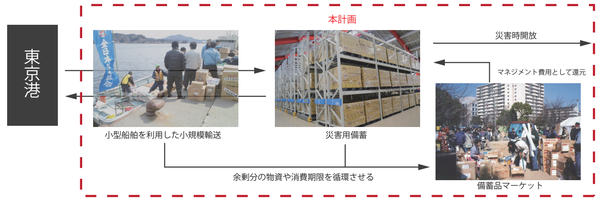
1.A　知識の貯蔵による交流スペース

寺社集積地であった対象地において、寺子屋の再解釈として、本の持ちよりカフェ、コワーキングスペースを計画する。周辺住民が不要になった本や寄贈したい本を持ちより集まることでこの場に本が貯蔵される。ワークショップなども企画、運営されることで、この場は知識の貯蓄という役割を担う。また、貯蓄された知識は人々を媒介し循環することで地域に還元される。



1.B　災害備蓄倉庫、及び備蓄品マーケット

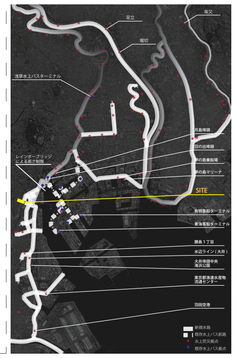
小型船舶を利用した水上ネットワークによる小規模輸送を行う。本計画における建築物が基幹的備蓄倉庫として物資の貯蓄を行う。本計画では恒常的に物資の搬入を行うと同時に、その余剰分は更新年数に応じて外部に放出するマーケットと共に計画する。



2. 循環 - 舟運による港湾マネジメント計画

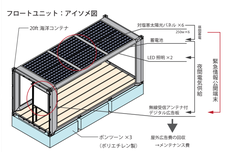
東京湾は現在、大きな転換点を迎えている。建築用途をが変わりつつある東京湾に対し、現在のインフラの状況では利便性や世界的な港湾機能の需要に対応していない。そこで、脆弱な交通網の港湾における人の流動を支えるために、指定された水上防災拠点などを利用した水上ネットワークを提案する。海手と山手が接続される本計画地を水運拠点として、大型船舶の入れないレインボーブリッジ内の港湾をつないでいく。

現在の水上防災拠点では人の恒常的な移動を考慮されていないため、護岸と水上交通をつなぐ装置を提案する。そこで、海洋コンテナの水上輸送されたフロートデッキを用い、構築することで水上ネットワークの端子とする。

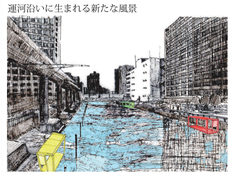


2.A　既存運河を活かし、開かれる水運ネットワーク

2.B　停留所 20ft コンテナを活用したフローユニット

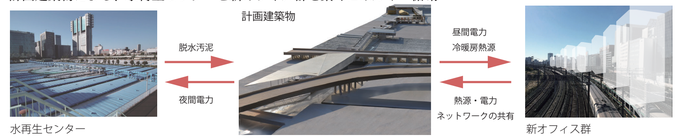


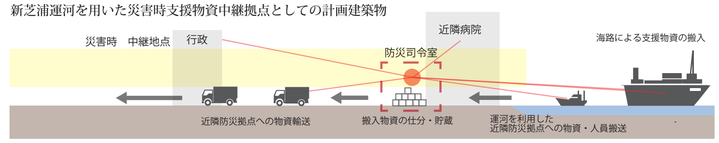
運河沿いに生まれる新たな風景



□周辺環境を活かした建築・地域環境計画

計画建築物による、水再生センターと新オフィス群を繋ぐエネルギー循環



水再生センターで処理される汚水は、汚泥を水中に沈殿・分離させることにより、再生水と脱水汚泥となる。従来、再生水は河川などに放流され、汚泥は汚泥処理施設での焼却処分が一般的であり、そのため、再生水の冷熱及び汚泥焼却時の温熱は利用されることなく捨てられていた。
本計画において、上記 **2 つの未利用エネルギーの効率的な利用および、計画建築物での再生水の直接利用を提案する。**

新芝浦運河を用いた災害時支援物資中継拠点としての計画建築物